

グローバルGAP団体認証取得を農協がリード

グリーン近江農協(滋賀県)

取組の概要

- 4つの集落営農法人で構成する「JAグリーン近江老蘇集落営農連絡協議会」が、農協のリードの下、米、小麦、大麦、大豆、マンゴーのグローバルGAP団体認証を取得。
(米:平成29(2017)年8月、その他:平成30(2018)年9月)

事業化(プロジェクト化)成功のポイント

1 グローバルGAP認証取得を農協が積極的に支援

グリーン近江農協管内の老蘇集落では、集落営農が進展しており、集落の農地の約8割を4つの集落営農法人が集積。農協と組合員の日頃のコミュニケーションの中で、ほとんどが兼業農家である当該地域で、労働災害を起こさずに共同で作業できるように生産工程の管理レベルを揃えること、組織経営体として次世代に継承していくことが地域の課題であることが浮き彫りとなった。そこで、労働者の安全衛生管理体制を柱の一つにしているグローバルGAP取得を農協が提案し、取り組むこととなった。

GAP取得に当たっては、個別の経営体ではなく団体認証を受け、農協の営農振興課が事務局となり、「JAグリーン近江老蘇集落営農連絡協議会」を立ち上げた。農協は取得に向けたスケジュール管理、サンプル検査のサポート等の面でTACを通じた指導や、認証取得費用などを農協独自の事業等で支援。3年をかけ、4つの集落営農法人の全水稻作付面積に当たる176.5ha(米、生産量約870トン(平成29(2017)年))において平成29(2017)年8月にグローバルGAPを取得。平成29(2017)年11月には大豆の認証審査、平成30(2018)年6月には米の更新審査と、小麦、大麦、マンゴーの認証審査を受けた。平成30(2018)年9月に、これら全ての品目においてグローバルGAP認証を取得した。今後は、より確実に効率的なGAP管理を目指し、管理体制を整えていくこととしている。

2 個別認証でなく団体認証とする利点

- ① 協議会事務局が農場管理指導をすることで、各農場の管理負担を軽減できる(約300の管理作業項目の共有・分担)。
- ② 地域としてまとまることで産地ブランド力が形成できる。
- ③ 各法人で個々に認証を受けるより審査費用等が安くなる。

3 グローバルGAP取得の効果

- ① 生産工程の明確な記録・管理が、後継者や構成組合員の作業実施マニュアルになり、特に集落営農においては、将来への技術・知識・経験の向上・継承につながる。組合員からはこの点の評価が特に高い。
- ② 地域内で生産工程の基準が確立することにより、環境こだわり米・特別栽培米といった高付加価値米の生産において、生産技術の平準化、産地としての品質の底上げにつながる。
- ③ 認証は個々の構成法人でなく、協議会(農協)がどのように生産・経営管理しているかがポイントになるため、農協が中心となって認証作物の有利販売や生産資材価格の低減化に努めることで集結力向上につながる(同農協の取組例:認証米のパックご飯による輸出促進等。)

取組の経過

平成26年7月～平成27年7月

コンサルタント会社によるGAPの研修
GAP教育システム「GH評価制度」

平成27年8月～平成28年6月

コンサルタント会社による
GLOBALG.A.P.認証取得に向けた農場監理

平成28年10月～平成29年4月

審査会社による
GLOBALG.A.P.認証審査

年月	主な取組内容	年月	主な取組内容
平成26年7月	GAPについて座学 農場評価(石寺)	平成27年12月	内部検査(石寺、西老蘇、内野、東老蘇) JA内部監査
平成26年8月	GAPについて座学 農場評価について検討会	平成28年6月	内部検査(4法人)、JA内部監査
平成26年12月	GAPについて座学 農場評価(石寺、西老蘇、内野)	平成28年10月	グローバルGAP認証審査(収穫現場確認)
平成27年7月	JA事務局のGAP管理システム指導 リスク評価と安全研修(4法人集合研修) 農場評価(東老蘇)	平成29年3月	自主内部監査(JA事務局) 自主内部検査(東老蘇、石寺、内野、西老蘇)
平成27年8月	内部検査(石寺、西老蘇、内野、東老蘇) JA事務局の内部監査	平成29年4月	グローバルGAP認証審査(JA事務局、西老蘇、石寺)
		平成29年8月	認証